

弥生時代から古墳時代の大形建物

—古津八幡山遺跡の大形竪穴住居と掘立柱建物を考える—

2019 6. 11 (火) ~10. 27 (日)

企画展開催にあたって

古津八幡山遺跡は、標高約 50m の丘陵上にある弥生時代後期～終末期（約 2000 年前～1750 年前）の大規模な高地性環濠集落で、古墳時代中期（約 1600 年前）には県内最大の古墳である古津八幡山古墳が築かれます。

当時の日本列島における社会情勢などを考える上で核となる重要な遺跡であることから、平成 17 年に国の史跡に指定されました。指定後は復元整備を行い、平成 27 年 4 月から歴史の広場として全面供用を開始しています。

古津八幡山遺跡はこれまでに遺跡全体の約 1/3 が発掘調査されています。史跡をより適切に保存・活用していくため、史跡内外における遺跡の状況をより把握することを目的とした発掘調査を平成 29 年度から行っており、本遺跡で初の掘立柱建物や、最大の竪穴住居が見つかるなど、多くの重要な成果が得られています。

本企画展では、それら建物に焦点をあて、その性格や機能について探ります。

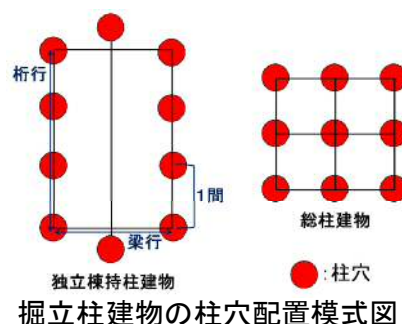
企画展で使用する時代などの名称

本企画展では弥生時代について前期、中期、後期、終末期の 4 時期に区分しています。今回の展示の中心となるのは、このうちの弥生時代後期と終末期で、邪馬台国の女王、卑弥呼が生きた時代と一部重なる時期となります。なお、弥生時代の終末期については古墳時代早期と呼ぶ場合もあります。弥生時代の実年代については諸説ありますが、弥生時代後期のはじまりは紀元後すぐくらい、古墳時代前期のはじまりは西暦 250 年くらいと推測されます。

本企画展で使用する建物などの名称

竪穴建物の多くは居住用と考えられますが、それ以外にも倉庫、集会所、工房跡、祭祀場など様々な用途に利用されていた可能性が指摘されています。そのため、居住用であることが確認できない場合には、竪穴建物と表記した方が確実といえます。他方、古津八幡山遺跡では、これまでパンフレットや各種刊行物・案内板などで竪穴住居と表記してきました。これまでの経緯を踏まえ、今回の企画展でも古津八幡山遺跡の竪穴建物は竪穴住居と表記しています。

掘立柱建物については柱穴と柱穴との間を 1 間と呼称しています。また、建物の梁間の外側に棟木を支える柱穴をもつ掘立柱建物を独立棟持柱建物と表記しています。なお、1 間ごとに格子状に柱穴をもつ掘立柱建物を総柱建物と呼んでいます。



古津八幡山遺跡における弥生時代の竪穴住居

古津八幡山遺跡では、これまでに弥生時代後期・終末期の竪穴住居が 61 棟確認されています。本遺跡での弥生時代の一般的な竪穴住居は、平面が四角形で、四隅が丸みをもつ「隅丸方形」の竪穴住居です。また、一边は 5 m 前後の大きさのものが一般的です。壁際には排水や湿度調整などのためと考えられる溝(壁溝)が巡ります。柱は基本 4 本柱で、中央には炉跡(焼土)があり、壁際中央には貯蔵穴が 1 つ設けられます。

なお、掘削した土砂を山側に周堤状に盛り上げ、さらに外側に周溝をもつものも存在します。

これまでの調査で焼失住居が 3 棟確認されています。そのうちの 1 棟(SI1730)からは多くの炭化米が出土しました。炭化米の中には籾殻が残存するものもあり、穂束や籾の付いた稲藁の状態であったと考えられます。炭化米の状態からは、比較的弱い火や熱を受けて炭化したと判断されます。



古津八幡山遺跡出土の炭化米
(竪穴住居(SI1730)から出土)

建物の性格

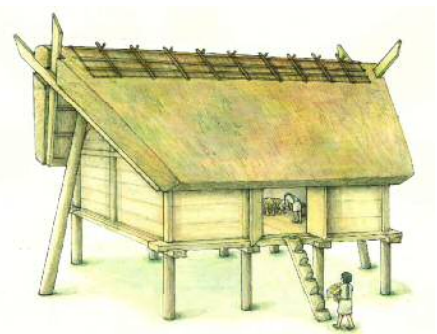
一般的に竪穴住居の多くは居住用と考えられますが、それ以外にも倉庫、集会所、工房跡、祭祀場など様々な用途に利用された可能性が指摘されているものも全国には例があります。

掘立柱建物においても様々な用途に利用された可能性が指摘されています。掘立柱建物の機能としては大きく以下の 4 つが考えられます。

- ① 住居 ② 倉庫 ③ 神殿などシンボリックな建物 ④ 小屋などの簡易な建物

今回、古津八幡山遺跡で見つかった掘立柱建物(SB1)の性格については、今後の調査で周辺の状況をより把握した上で判断する必要がありますが、掘立柱建物の柱を立てるための掘り方が比較的しっかりと掘られていることや柱の直径が大きいこと、建物の外側にいわゆる雨落ち溝が確認されていないことなどから、住居として利用された可能性は低いと推測しています。

今のところ、倉庫あるいは神殿などシンボリックな建物、あるいはその両方の性格をもった建物であった可能性を想定しています。



古津八幡山遺跡掘立柱建物(SB1)
想像イメージ図

新たに見つかった掘立柱建物

古津八幡山遺跡では、昭和 62（1987）年の第 1 次調査から平成 25 年の第 19 次調査まで、竪穴住居が 50 棟以上見つかっていましたが、掘立柱建物は見つかっていませんでした。それが、平成 29・30 年に実施した第 20・21 次調査において、初めて掘立柱建物が発見されました。

確認された掘立柱建物（SB1）は、柱間が 1 間×3 間で、梁行約 4.5m、桁行約 6.2 m の建物と考えられ、母屋面積で約 28 m²を測ります。梁が長いことや、梁の中央外側で柱穴が対の位置で確認されたことなどから、この建物は独立棟持柱建物の構造になると推定されます。

なお、平成 29・30 年の調査面積は約 400 m²と比較的狭いですが、見つかった掘立柱建物の周辺からは 200 基以上のピットが検出されました。これらのピットから出土した遺物や、堆積した土の特徴などから、その多くは弥生時代の掘立柱建物の柱の穴と推測されます。そのため、弥生時代にはこの場所に複数の掘立柱建物が建てられていたと考えられます。



掘立柱建物（SB1）調査風景（南西から）

新たに見つかった大形竪穴住居

平成 29・30 年の発掘調査で見つかった竪穴住居（SI1）は、やや丸みをもった隅丸方形の平面形で、一辺約 9.5m と、長さが古津八幡山遺跡で一般的な竪穴住居の約 2 倍もあり、面積にするとおよそ 4 倍にもなる大規模なものです。

古津八幡山遺跡では、これまでに 61 棟の竪穴住居が確認されていますが、その中で最大の竪穴住居となります。県内においても、この時期の竪穴住居としては最大級の竪穴住居といえます。

床面まで発掘調査をした竪穴住居の南西側では、柱穴と考えられるピットがあり、断面の観察から直径約 0.45m の木柱が想定されます。

この大形の竪穴住居は、出土した土器から弥生時代の終わり頃（終末期）と考えられ、古津八幡山遺跡の中では新しい時期の竪穴住居となります。

なお、壁際で壁溝と考えられる溝が 2 条確認されていることから、一度住居の建て替え（拡張）を行っていると考えられます。



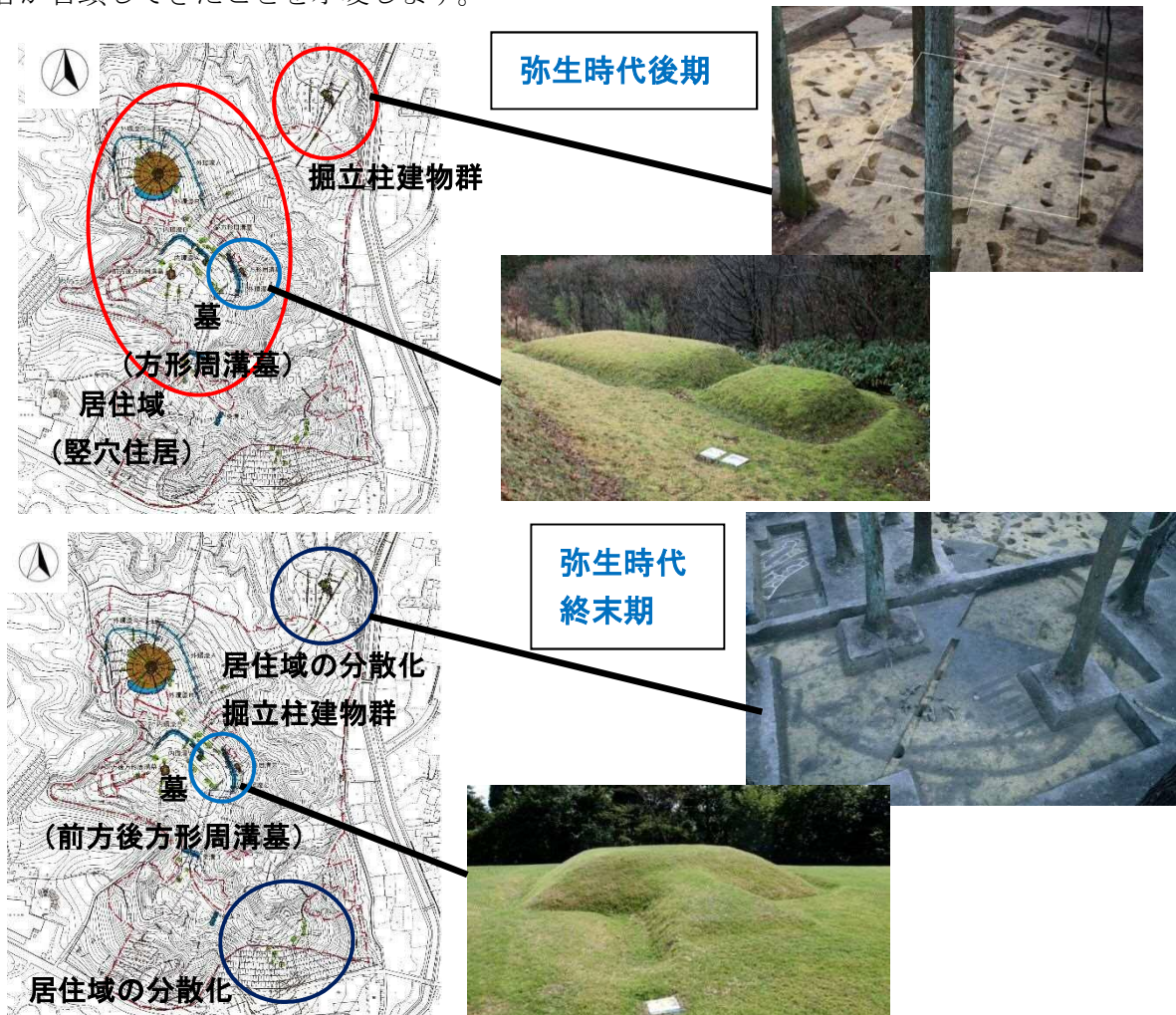
大形竪穴住居（SI1）全景（北西から）

古津八幡山遺跡の土地利用

弥生時代後期には、外環濠の内側を中心に竪穴住居が密に分布していることから、丘陵上の外環濠内部が主要な居住域として利用されていたと考えられます。

平成 29・30 年の発掘調査によって新たに発見された掘立柱建物群の機能については、低地に比較的近く、水や米などの物資を運び入れるのに好都合な立地であることから、それら建物群の一部は倉庫であった可能性が推測されます。

一方、弥生時代の終わり頃になると竪穴住居の分布が外環濠の外側に広がる傾向が見られます。この時期はすでに外環濠の一部が埋まり、機能が低下している段階です。平成 29・30 年の発掘調査で見つかった大形の竪穴住居はその頃のものです。なお、内環濠は外環濠よりも新しく、弥生時代終末期に掘られた可能性があります。この時期に当遺跡で最大の竪穴住居が丘陵中腹域につくられた背景については今後の検討課題ですが、最高所にある前方後方形周溝墓も近い時期が想定され、この時期にムラの中で有力者が台頭してきたことを示唆します。



古津八幡山遺跡における弥生時代後期から終末期の土地利用

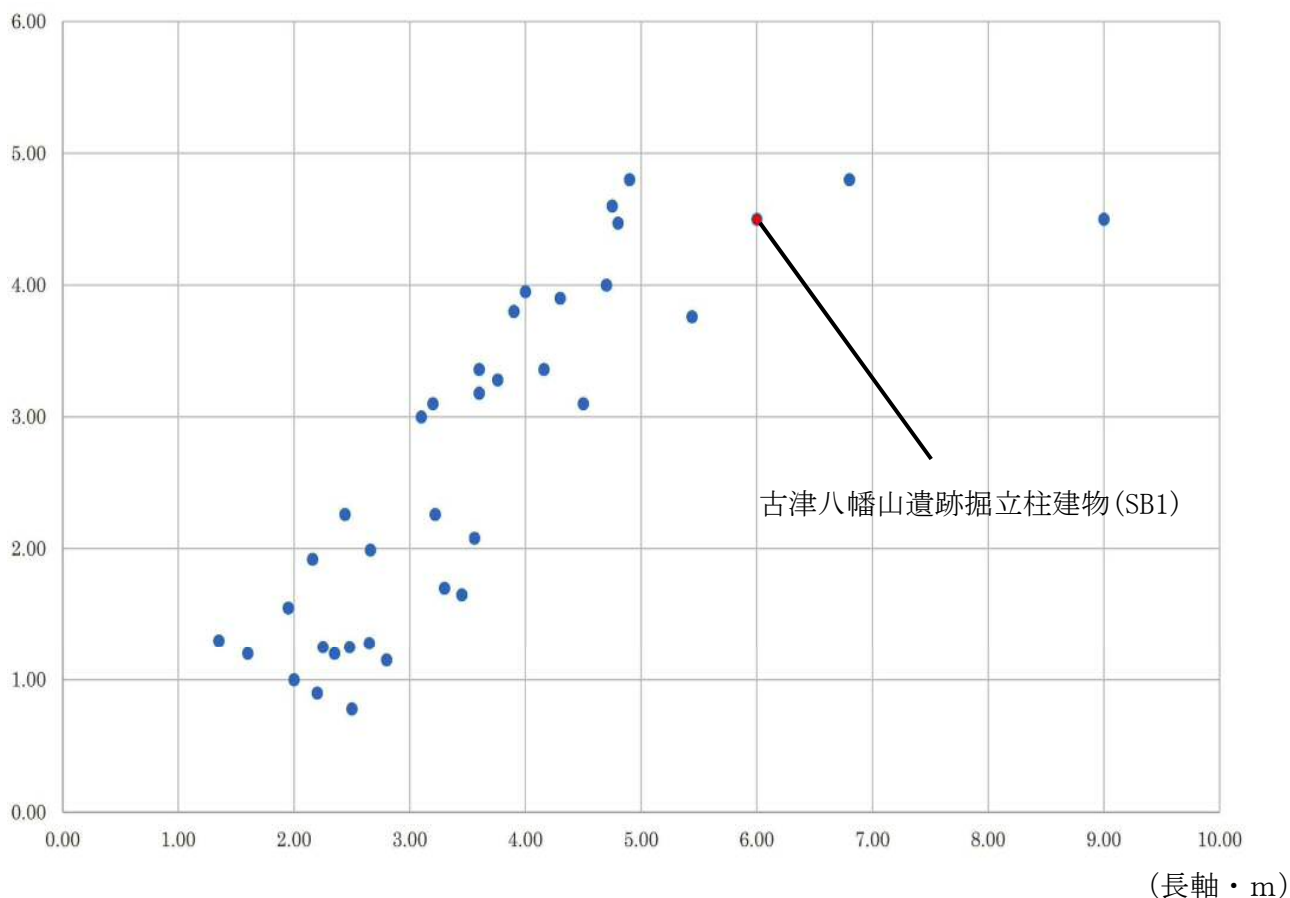
県内の弥生時代後期・終末期の掘立柱建物

新潟県内における弥生時代後期・終末期の掘立柱建物の大きさはさまざまですが、一辺 3、4 m 前後のものが多く、面積 20 m² 未満のものが 7～9 割を占めます。

古津八幡山遺跡の掘立柱建物（SB1）は、短軸 4.5m、長軸 6.2m で、この時期の掘立柱建物としては比較的大きいものです。なお、子安遺跡（上越市）では一定数の掘立柱建物が存在しますが、いずれも 1 間×1 間の小規模なもので、小屋など簡易な建物が想定されます。

面積でみると、20 m² を超す掘立柱建物が存在するのは、古津八幡山遺跡のほかに、北区の正尺 C 遺跡、西岩野遺跡（柏崎市）、釜蓋遺跡（上越市）、六反田南遺跡（糸魚川市）、蔵王遺跡（佐渡市）の 6 遺跡があります。このうちの 3 遺跡で独立棟持柱建物がみられる点は注目されます。これら独立棟持柱建物の性格については、①神殿、②倉庫、あるいは③神殿かつ倉庫、といった可能性が指摘されています。独立棟持柱建物がつくられた背景について検討していく必要がありますが、いずれにせよシンボリックな建物であった可能性を推測させます。

（短軸・m）



新潟県内における弥生時代後期・終末期の掘立柱建物の規模

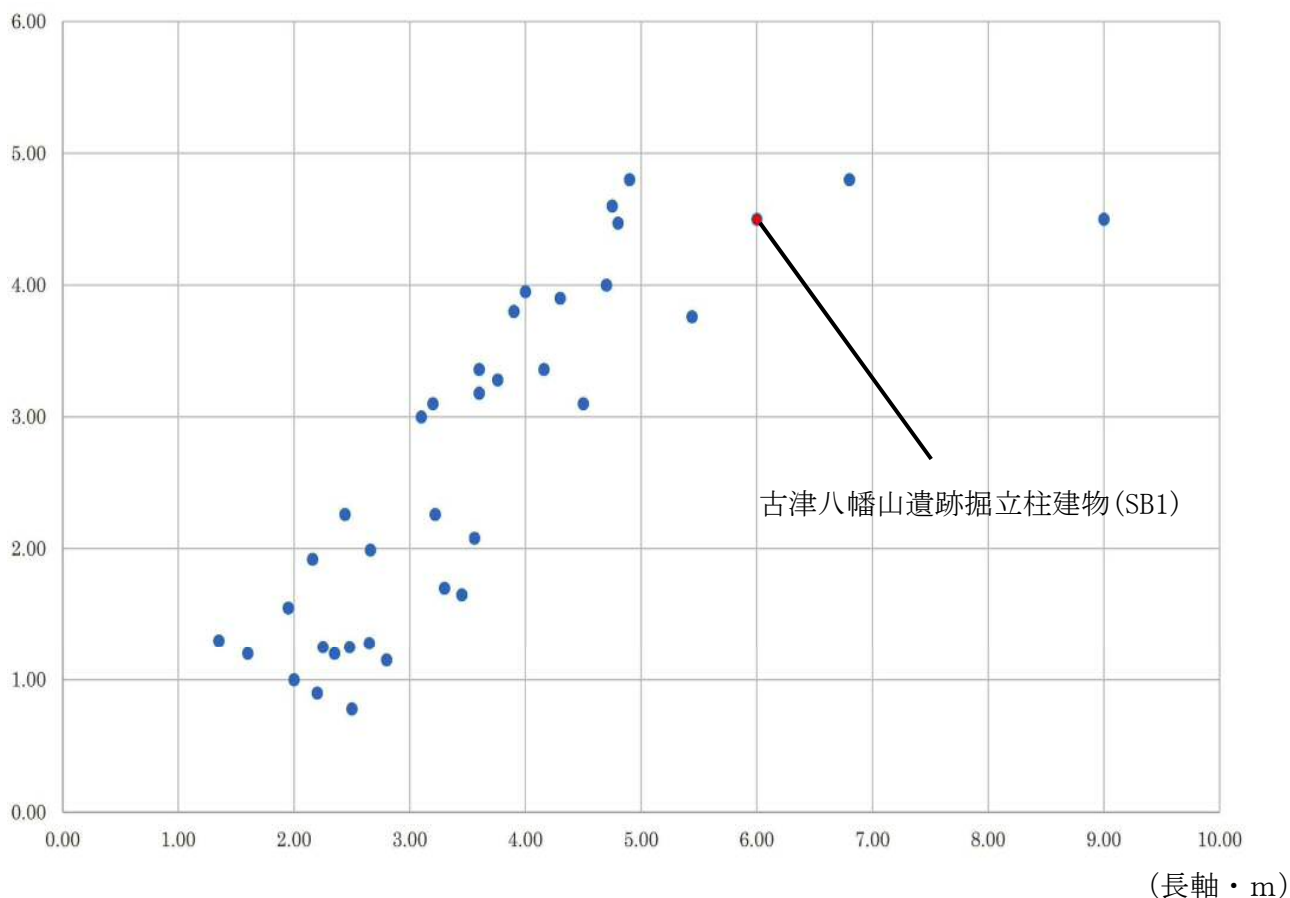
県内の弥生時代後期・終末期の掘立柱建物

新潟県内における弥生時代後期・終末期の掘立柱建物の大きさはさまざまですが、一辺 3、4 m 前後のものが多く、面積 20 m² 未満のものが 7～9 割を占めます。

古津八幡山遺跡の掘立柱建物（SB1）は、短軸 4.5m、長軸 6.2m で、この時期の掘立柱建物としては比較的大きいものです。なお、子安遺跡（上越市）では一定数の掘立柱建物が存在しますが、いずれも 1 間×1 間の小規模なもので、小屋など簡易な建物が想定されます。

面積でみると、20 m² を超す掘立柱建物が存在するのは、古津八幡山遺跡のほかに、北区の正尺 C 遺跡、西岩野遺跡（柏崎市）、釜蓋遺跡（上越市）、六反田南遺跡（糸魚川市）、蔵王遺跡（佐渡市）の 6 遺跡があります。このうちの 3 遺跡で独立棟持柱建物がみられる点は注目されます。これら独立棟持柱建物の性格については、①神殿、②倉庫、あるいは③神殿かつ倉庫、といった可能性が指摘されています。独立棟持柱建物がつくられた背景について検討していく必要がありますが、いずれにせよシンボリックな建物であった可能性を推測させます。

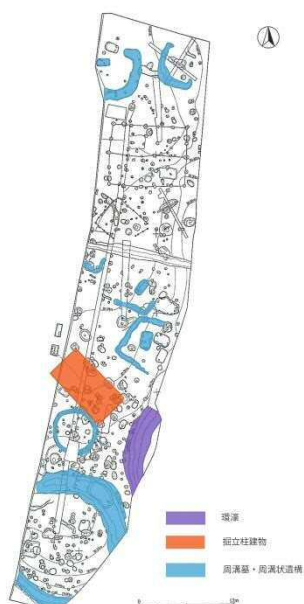
（短軸・m）



新潟県内における弥生時代後期・終末期の掘立柱建物の規模



釜蓋遺跡 左：竪穴建物（SI83・SI41）調査状況（上空から） 右：竪穴建物（SI83）炭化米出土状況
写真提供：上越市教育委員会



西岩野遺跡 遺構全体図



西岩野遺跡 掘立柱建物（SB1）全景（上空から 上が北東）
写真提供：柏崎市教育委員会



蔵王遺跡 左：1号竪穴式住居跡全景（西から） 右：6区 掘立柱建物（SB6 南東から）
写真提供：佐渡市世界遺産推進課

おわりに

古津八幡山遺跡が発見されてから 30 年以上が経過しました。これまでに遺跡全体の約 1 / 3 が発掘調査され、弥生時代の集落や古墳時代の古津八幡山古墳の状況などが明らかになってきました。

一方、まだ不明な点も多く存在しています。平成 29 年度から再開した発掘調査は、史跡内外において調査が不十分な場所の状況把握を目的とした発掘調査です。その結果、遺跡の北東地区において、古津八幡山遺跡で初めて掘立柱建物が見つかり、また、これまでに見つかった中で最大の竪穴住居が発見されるなど、当時の社会を考えるうえで重要な発見が相次いでいます。

さて、大形の竪穴住居がつくられた時期は弥生時代の終わり頃の時期で、各地の豪族が大きな墳墓を築く古墳時代の直前にあたります。大形の竪穴住居の性格や機能の解明については今後の課題といえますが、古津八幡山遺跡の最高所に築かれた前方後方形周溝墓も近い時期と推測され、次の古墳時代の豪族へとつながる有力な首長層が台頭してくるなど、社会が大きく変わっていく当時の情勢を反映している可能性があります。

時代	北陸南西部編年	八幡山遺跡	古津八幡山遺跡					
弥生時代中期	小松 専光寺 戸水B		東南部系	地元系 折表系	北陸系			
					環濠	竪穴住居	掘立柱建物	墓
			—	—	—	—	—	—
弥生時代後期 (古墳時代終末期)	1群 V-1群 V-2群 V-3群	彌生式	1期	S103S20 S103S16上層・S101005				
	2群 2-1群 2-2群	法仏式	2期	S103S02・S103S21・S103R02・S101006 S10602・S103S25 掘土中下層	環濠が上層まで埋没 ⇒一部再掘削? 内環濠掘削?	集落の出現 外環濠の掘削	掘立柱建物群?	四隅が切れる 方形周溝墓
	3群	月影式	3期	S11003		周溝を持つ 隅丸方形の 竪穴住居		
	4群		4期	S10705		大型竪穴住居		
	5群	白江式	5期		沖積地の集落の出現 高地性集落の廃絶			前方後方形 周溝墓?
	6群							
古墳時代前期	7群	古前クビ式						
	8群							
	9群	薬島式						
	10群							古津八幡山古墳山

古津八幡山遺跡の動向

展示解説

日 時 2019 年 8 月 11 日 (日)、10 月 20 日 (日) 13 : 30 ~

申込み 不要 (直接、弥生の丘展示館へお越しください。)